

## University Academic Repository

「戦争花嫁」と日系コミュニティ(III) :  
ステレオタイプに基づく排斥から受容へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安富, 成良, ヤストミ, シゲヨシ, Yasutomi, Shigeyoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/52">https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/52</a>

## 「戦争花嫁」と日系コミュニティ (III) —ステレオタイプに基づく排斥から受容へ—

安 富 成 良

### 〈要 約〉

前々稿（『嘉悦女子短期大学研究論集』通巻78号、2000年）において、「日本で作られた『戦争花嫁』のステレオタイプがアメリカでも踏襲され、差別、偏見が増幅された」とする本論文での仮説を実証するため、特殊慰安施設協会（RAA）やRAA廃止後の街娼などといった性を巡る状況や戦後日本の混乱期の社会状況を伝える日本の新聞、雑誌の報道を中心に検証した。また前稿（『嘉悦大学研究論集』通巻80号、2001年）においては、日本の状況や進駐軍兵士と日本女性の性を巡る報道がアメリカの日系社会のマスコミにいかにも報道され、日系社会における「戦争花嫁」のステレオタイプ形成にどう影響を与えたのかを論考し、更に「戦争花嫁」と係わり合いの多かった日系コミュニティとその特質について、日本社会との類似性と日系コミュニティのもつ排他性を中心に「戦争花嫁」との関連の中で考察した。

本稿においては「日系コミュニティにおいて『戦争花嫁』はいかに受けとめられてきたのか」ということについて、「戦争花嫁」の多くが入国した1950年代の日系コミュニティ問題との関連の中で論じた。特に1950年代にキムラらによって行われたハワイの調査事例を検証し、日系コミュニティにおける「戦争花嫁」問題の難しさと原因について考察した。最後に日系コミュニティにおいて「戦争花嫁」がこれまで果たしてきた役割を再評価し、日系コミュニティに正当な形で受け入れられる為にも、ロサンゼルスのリトルトーキョーにある「全米日系人博物館」が積極的にこの問題に取り組んで行くことが求められているとして、同館の果たすべき役割の重要性を指摘した。

### 〈キーワード〉

「戦争花嫁」、日系国際結婚親睦会、日系コミュニティ、日系コミュニティの特質、1950年代の日系コミュニティ、全米日系人博物館、日系アメリカ人市民協会（JAACL）

## 目次

(前々稿：Part I)

I. はじめに

II. 戦後の占領期の進駐軍兵士を巡っての社会状況

1. 連合軍の進駐にあたって
2. 特殊慰安施設協会 (RAA) 設立と公娼廃止後の「性」を巡る社会状況

III. 進駐軍兵士との国際結婚を巡っての日米の反応

1. 進駐軍兵士との結婚に関連した日本の新聞・雑誌の論調

(前稿：Part II)

2. 進駐軍兵士との結婚に関連した日系社会の新聞の論調

IV. 日系コミュニティを巡って

1. 日系コミュニティと「戦争花嫁」
  - (1) 日系コミュニティの特質～類似性と排他性を中心に～
    - a. 日本社会との類似性
    - b. 日系コミュニティの持つ排他性
  - (2) 日系コミュニティの特質と「戦争花嫁」
    - a. 類似性と「戦争花嫁」
    - b. 排他性と「戦争花嫁」

(本稿：Part III)

2. 日系コミュニティにとっての「戦争花嫁」
  - (1) 1950年代の日系コミュニティと「戦争花嫁」
    - a. 1950年代の日系コミュニティと「戦争花嫁」
    - b. ハワイの日系コミュニティでの調査事例
  - (2) 「戦争花嫁」の受け入れ
    - a. ステレオタイプを巡って～日系人の立場から～
    - b. 全米日系人博物館と「戦争花嫁」

V. おわりに

1. 受容の時代へ～今、求められているもの～
2. 今後の研究課題

## IV. 日系コミュニティを巡って

### 2. 日系コミュニティにとっての「戦争花嫁」

植木武 (2000) が調査した109名の「戦争花嫁」の渡米年の推移を見ると、1947年に1名入国した年が最も早く、1952年 (10名) に一つの小さなピークがある<sup>55)</sup>。これは1950年施行の公法717 (1947年日本人戦争花嫁法の修正法) の期限が1952年3月19日に切れる為にその日までに入国した人達が多かったことを示している。次の大きなピークは1956年 (19名)、1957年 (18名) となっている。これは1953年7月に朝鮮戦争が終結し休戦協定締結後、日本に戻ってきた兵士が、駐留中に日本人女性と知りあって結婚し、在日米軍基地内外での結婚生活が少し落ち着いてから日本人妻を連れて帰米したことがこの数字に表れている。また1952年のマッカーランウォルター法の制定により、「戦争花嫁」は移民割当外で入国出来るようになり、法的な制限は無くなり、渡米が容易になったことも1952年以降日本人妻の米国移住が増えた大きな要因である。

「戦争花嫁」の多くがアメリカに渡った1950年代はアメリカにとって、また日系コミュニティにとってどのような時代であったのであろうか。次にこうしたアメリカ社会全体の流れと日系コミュニティの状況について、「戦争花嫁」との係わり合いの中から考察する。

#### (1) 1950年代の日系コミュニティと「戦争花嫁」

1940年代後半からヨーロッパや極東地域においては、東西陣営の覇権を巡る争いが激しくなり、緊張感が次第に高まってきた。アメリカはヨーロッパの問題については北大西洋条約を調印し、北大西洋条約機構 (NATO) 軍のリーダーシップを取る一方、極東で1950年6月に朝鮮戦争が勃発した際には、大量の兵士を極東地域に配備した。こうして1950年代に入ると、アメリカとソ連との冷戦状態はますます深刻さを増すようになった。

アメリカ国内ではこうした緊張した国際情勢を背景に1950年に入ると反共産主義のヒステリックな叫びが席卷するようになり、国内が保守化の傾向を帯びるようになった。連邦政府職員は忠誠度を試され、マッカーシー上院議員の人気は朝鮮戦争がドロ沼化するにつれて高まり、共産主義同調者と見なされた人は多くの場から追放されるようになった。アメリカでは国民に白人中産階級の価値観や規範をモデルとするように求め、無理な協調や調和を強要し、それに合致しない人々の思想や行動を激しく攻撃するようになった。こうした時代においては伝統的な家族観が求められ、家庭崇拜の風潮がひろまり、「女の場合は家庭にあり」とする伝統的な女性像が社会を支配した<sup>56)</sup>。

アメリカ国内のこうした風潮をうけて1952年に、これからアメリカに渡る「戦争花嫁」を対象とした「赤十字花嫁学校」(アメリカン・レッドクロス・ブライド・スクール) が東京六本木の米軍キャンプ内に初めて設立された。アメリカの白人中流社会の伝統的な女性像を身に付け、立派な家庭を築くために「戦争花嫁」は週に5日、講習をうけた。花嫁学校では家庭生活に関すること、エチケット、マナーは勿論のこと「次代アメリカ国民の母となるにふさわしいようにアメリカの地理や歴史を中心として必要な教養がさずけられた」<sup>57)</sup>。ここでのカリキュラムの基本は「より良い家庭婦人の育成」であり、1950年代の冷戦下の保守化傾向をそのまま反映したものであった。軍の将校夫人や大使館、赤十字などの中産階級の白人女性がボランティア活動の一貫として教え、こうした花嫁学校はその後全国各地に作られた。中産階級のアメリカ人になる為の知識や教養を身につけ

て海を渡った「戦争花嫁」が見た日系コミュニティや婚家の日系人家族はどういうものだったのであろうか。果たして花嫁学校で学んだアメリカの伝統的な価値観や母親像は日系コミュニティや家族内では役に立ったのであろうか。次にこうした点について1950年代に日系人と結婚した「戦争花嫁」やその他の人種のアメリカ兵士と結婚した「戦争花嫁」などを対象にして行った研究を検討し、そこで明らかになったことなどをもとに検証してみる。

#### a) 1950年代の日系コミュニティ

戦後、多くの日系人はかつて住んでいた日系コミュニティに戻り、教会や寺院などでの一時仮住まいの共同生活を送った。しかし時が経つにつれ、各家族は住むべき場所を確保し、共同生活に別れを告げ、新しい生活を送るようになった。終戦時には50歳代後半から60歳代前半になっていた一世は、戦前に所有していた農場も失い、農業を続けるにしても一から出直さなければならなかった。そこで農業をあきらめ、庭師や清掃夫、雑役夫といった未熟練労働者として再出発した一世も多かった。日系コミュニティの経済構造も戦後は変化を見せるようになり、以前は就業場所が日系コミュニティ内が主流であったのに対し、戦後は日系コミュニティの外に職を求める傾向を持つようになった。またグレンも指摘しているように一世、二世共、働く女性が増え、家政婦のような仕事に従事する一世女性の数が多くなってきた<sup>58)</sup>。一世は帰化権や市民権が認められるようにはなったものの、ことばの問題もあり財産管理といった重要なことは二世にまかせることが多くなり、日系コミュニティの運営の主導権は一世から二世へと次第に移行し、二世がコミュニティ再建の中心となった。

二世にとって戦時中の強制収容所での苦い体験は大きな教訓となり、アメリカの白人社会で認められるためには、白人社会の価値観を身につけ、白人以上に白人化することが成功する鍵となると信じ、白人社会への同化を最優先に考えた。そのため「120%のアメリカ人」になることを求めた多くの二世は、両親から自立して日系コミュニティを離れ、郊外の白人中産家庭のコミュニティに移り住むようになった。このような強い社会上昇志向と白人主流社会への接近は日系人を下の階層から脱出させた。しかし他方、収容所体験の影響により完全に忘れ去ろうとしていた、両親から教え込まれた日本の文化的特性や民族的誇りは心の隅に残っている場合が多く、二世の精神構造の中には、「日本」「日系」といったエスニシティへのスティグマと潜在意識で存在する民族的誇りという双方が混在しており、「民族への凝集性とホスト社会への同化」を両立させていた。つまりアメリカ的価値観を反映させ、個人主義志向を目指したいと願う反面、二世の心の中には両親から教え込まれた日本的価値観も残存しており、集団志向、総意志向、協調志向もしみこんでいたのであった。この総意志向、協調志向は前述したように、1950年代の保守化傾向のあったアメリカで尊重されていた白人中産社会の価値観とも一致したものでもあり、二世の文化変容の促進に貢献した。いずれにしても二世の多くは日本的な価値観とアメリカ的な価値観の狭間で大きく揺れ動き、アメリカ社会においても一世の影響がまだ残っていた日系人のコミュニティにおいても遊離した存在となり、独自のサブカルチャーを発達させた、とナカノは指摘している<sup>59)</sup>。

「戦争花嫁」が結婚相手として選んだ二世はこのように、アメリカ社会への同化を強く願い、自らの国家への忠誠心を表わす為に軍隊に志願した男性であった。戦後もその多くは軍隊に留まったが、その大きな理由として、日系人に対する偏見や差別が残っていた為、ホワイトカラーなどの希

望する職業につくことが困難であったことも挙げられる<sup>60)</sup>。こうして二世はアメリカ中流社会の価値観を身につけていた反面、親から受け継いだ日本的な規範、価値観も持っていたために、家庭においては保守的な面も兼ね備えていた。

日系人の結婚観や家庭観を表わすものとして、白人、中国系及び日系の男性と結婚した日本人女性及び日系人女性に対して行ったテリーL・スコットの調査がある。ナカノはこの調査結果をもとに、日系人男性と結婚した女性の大多数は職に就いていないのに対し、白人男性と結婚した女性の大部分は逆に仕事をもっていた、と指摘している<sup>61)</sup>。この調査では「妻や母としての役割を最優先させるか」という質問に対してはほとんどが「はい」と答えているが<sup>62)</sup>、これは多くの二世がいかにか一世の両親の影響を受けていて、日本的な価値観を持っていたのか、ということの証左である。このように、二世の男性の多くも一世の両親も、嫁には伝統的な性役割を果たすことを求めることが多く、二世自身も男女を問わず結婚観、家庭観については両親の意見に近い考えを持っていることが多い、ということはこの調査結果は物語っている。

こうした価値観を持っている二世男性と結婚した場合、その妻に求められたものは、前述のような冷戦時代のアメリカの伝統的な家庭観に近いものであった。冷戦時代のアメリカで求められた白人中流社会の価値観については多くの「戦争花嫁」は花嫁学校で講義の中である程度までは教わったことであった。日系二世と結婚した「戦争花嫁」は婚家で結婚生活で「アメリカの花嫁」として夫や夫の両親、兄弟姉妹との人間関係はうまく構築できたであろうか。ハワイの日系コミュニティにおけるキムラの調査をもとに検証してみる。

#### b) ハワイの日系コミュニティでの調査事例

キムラ (1957) は、1) 日本人「戦争花嫁」と日系二世の夫の124組、2) 日本人「戦争花嫁」と非日系の夫の60組、3) ヨーロッパ系「戦争花嫁」と日系二世の夫の60組、そして、4) ヨーロッパ系「戦争花嫁」と非日系の夫の80組との面接調査の研究結果を発表した<sup>63)</sup>。この研究は1953年より実施したもので、アメリカ入国後間もない1950年代初期の「戦争花嫁」が日系コミュニティにおいて、いかに受け止められていたのかを調査した初めての研究である。この研究では4つのカテゴリーの「戦争花嫁」の結婚満足度が夫の人種的背景によって違いがあるのか、人種面から見たこの4つのカテゴリーのグループの「戦争花嫁」の結婚満足度と結婚相手の家族、兄弟・姉妹との人間関係の満足度に相関関係があるのかを調査し、アメリカ（この場合はハワイ）社会への適応の状況について考察したものである。この調査結果を表で示すと次のようになる。

表2. 人種別にみた「戦争花嫁」の結婚生活満足度

	夫婦の人種	満足	普通	不満
1)	妻・日本人 夫・日系人	39%	51%	10%
2)	妻・日本人 夫・非日系人	75%	15%	10%
3)	妻・ヨーロッパ人 夫・日系人	70%	15%	15%
4)	妻・ヨーロッパ人 夫・非日系人	51%	30%	19%

1) 124組、2) 60組、3) 60組、4) 80組

表3. 人種別に見た「戦争花嫁」の義父母・義兄妹との人間関係満足度

	夫婦の人種	満足	普通	不満
1)	妻・日本人 夫・日系人	48%	35%	11%
2)	妻・日本人 夫・非日系人	72%	13%	7%
3)	妻・ヨーロッパ人 夫・日系人	60%	33%	7%
4)	妻・ヨーロッパ人 夫・非日系人	55%	25%	16%

1) 124組、2) 60組、3) 60組、4) 80組

この中でキムラは日本人「戦争花嫁」と日系二世との結婚満足度と日本人「戦争花嫁」と非日系の夫とのそれとを比較したが、日系二世との結婚の満足度の低さと夫の家族、兄弟・姉妹との人間関係の満足度の低さには相関関係がある、と指摘した<sup>64)</sup>。ここでは日系二世と結婚した日本人「戦争花嫁」の満足度が他の3つの集団の中で一番低い調査結果となったことについて、キムラが指摘している原因を検証すると共にキムラが無視していた重要な側面についても論じてみる。

第1の原因として、一世の義父母と「戦争花嫁」との日本での生育環境の違いをキムラは指摘している。一世の多くは西日本の貧しい農村や漁村の出身であるのに対し、コナー(1976)が指摘しているように「戦争花嫁」の多くは都市部(連合軍が駐留する基地周辺都市)の中流家庭の出身であり<sup>65)</sup>、一世が使用する日本語の表現の古さや日本語の方言・なまり、一世の教育程度の低さ、一世の移住前後の日米における生活水準の低さに対して、若い彼女たちがバカにする傾向があったという。こうした両者の生育環境から来る誤解や偏見が一世のプライドをしばしば傷つけ、両者の人間関係に悪影響を与えたとキムラは述べている。この「生育環境(出身地、ことば、教育程度、生活水準)の相違」説は的を射た指摘であるが、更にキムラが見逃した「生育環境」のうち重要な点として、両者が日本で育ってきた「時代」の相違についても検討が加えられるべきである。キムラ論文の中に被調査者の属性を示す記述が無く、正確な判断はつきかねるが、これまでの多くの研究から1953年の調査開始時には「戦争花嫁」の平均年齢は25歳前後、義父母が60~70歳であることが推測される。これを当てはめるならば明治生まれの義父の多くは19世紀末から20世紀始めにハワイに出稼ぎ目的で渡り、20世紀に入ってから1920年の「写真花嫁」禁止前後までに妻を迎えた。一方「戦争花嫁」は昭和一桁生まれが圧倒的に多く、義務教育は戦前・戦中に受けた場合が多い。そして重要なこととして、彼女たちは戦後の混乱期の民主主義の時代を体験した世代であった。両者の過ごしてきた時代の相違は多くの点で両者の溝を深める作用を及ぼした。

第2の原因として両者の間にある価値観の違いがある。キムラはこれらを「時間」という尺度では捉えておらず一つの現象として、順不同で個々に列記しているが、価値観を例にとって考察してみよう。「孝行」については、ハワイでは日本以上に、子供の親への「義理」や「恩」を大切な倫理概念として教えていた。従って「親孝行」についても、「親孝行」をすることを果たさなければならぬ徳目として家庭内で厳しく教え、息子の嫁に対しても「孝行」を強く求めていた、とキムラは記している。一世が生まれ育った戦前においてはこうした考えは当然のこととして受け入れられていたことである。これに対して戦後の民主主義の息吹を体験し、夢と憧れを抱いてアメリカに渡ってきた「戦争花嫁」は、義父母に対して果たすべき義務として「(親)孝行」を考えていたの

ではなく、自分がハワイに来たのは自分と夫の家庭を築く為であると答えており、一世が期待していた「(親) 孝行」を義父母にしなければならないという義務感を抱いていない場合が多かった<sup>66)</sup>。自分は「日系」といえども「アメリカ人」の夫と結婚したのであり、実家の両親も自分への手紙でハワイ移民に関して悪口を書き、婚家から独立するようにと自分に言っている、と語っていた「戦争花嫁」の例もキムラは紹介している。論文の注においてキムラは、花嫁学校で「戦争花嫁」はアメリカ人のように振る舞い、アメリカ人と同じように生きて行くことを学んだことを付記しているが、このことは花嫁学校で学び、夢に描いた「アメリカの花嫁」と現実の「日系コミュニティでの花嫁」のギャップがこの調査結果に表れている、ということを示している。

「戦争花嫁」は日本的な古風な家父長制に基づいた「恩」、「義理」、「孝行」といったことを義父母から押し付けられることに対して不満を抱くことが多かった。その根底には第1の原因で指摘した「生育環境の差異」から、相手を見下していたことも大いに影響を与えた。更に義母は「戦争花嫁」がやってくる数十年前に若い嫁として海を渡り、粗末な服装で、化粧もせず、苦勞を重ね、愚痴も言わず、夫に従い、そしてようやく今のある程度の贅沢が出来る暮らしを送ることが出来た、という自負を持っていた。それに対し「戦争花嫁」はアメリカの派手な服を着て化粧をし、考え方にしても行動にしても婚家の親から自立していると考えていた。このことは義父母には予期していなかったことであり、自分たち親に逆うような言動をし、アメリカ人に成りきっていることが我慢できなかった。嫁が「日本」という同じ「文化背景」を持っているので、日本的な価値観を共有できると義父母は思っていたが、実際はこのことが逆に、お互いの人間関係を難しくしたのであろう、というキムラの指摘には全く同感である。

第3の原因として両者とも同じ言語を使用していたことがある。お互いに日本語を理解できることから逆にお互いの反目した感情が言葉に出て、人間関係が上手く作用しなかった、という点である。このことは特に説明を要しないのではないかと。ヨーロッパ系の「戦争花嫁」と日系二世の義父母・義兄妹との人間関係の満足度が高いのは、お互いの感情の機微を表す際、同一言語でコミュニケーションをとるのが双方にとって難しく感じ、込み入ったことにはお互いが介入しなかったことがある。更に、前述の双方の異なる「文化背景」も大きく作用して、日系の義父母・義兄妹も「相手はガイジンなのだから、しかたがない」とあきらめたことによる。このように、微妙な感情の揺れをお互いの共通言語で表せるか、それとも表せないかで感情をオブラートに包んで伝えるか、ということにより人間関係も影響され、そのことがキムラの調査結果に如実に表れている。

最後にキムラが指摘していない重要な原因として、この論文の大きなテーマである「戦争花嫁」に対して日系の義父母・義兄妹が抱いたと想定されるステレオタイプがある。本論文を通じて明らかにしてきたように、「戦争花嫁」のステレオタイプは両者の関係悪化に大きな影響を与えた。このことを間接的に示すのは日系アメリカ人市民協会(JACL)の機関紙の『パシフィック・シチズン』(以下PCと略)の1950年12月23日付けの「ホノルル報告:戦争花嫁がやってくる、ジョニーが凱旋して外国人の妻を連れて再び故郷に戻ると、地元の人達の間には波風をたて嵐をひきおこす」と題された記事である。この記事は、ハワイ大学のハワイ社会調査研究所からの研究報告をもとに、新しくハワイにやってきた「戦争花嫁」がハワイでどう受止められているのか、ということについて紙面の全面を飾った記事である<sup>67)</sup>。「初めて紹介された時、安っぽい女のように見えた。チューインガムを噛み、真赤な口紅、そして手足の爪には臙脂色のマニキュアをし、髪はカールで顔は厚化

粧をしていて、昔の日本の伝統的な女性とはあまりにもかけ離れてたので、がっかりした。息子は都会の娘とではなく田舎の娘と結婚してもらいたかった」という義母のコメントも掲載されている。ハワイの日系コミュニティの反応として、上述のような余りにも現代的なアプレ娘に対して失望している雰囲気をこの記事は伝えている内容となっている。JACLのハワイ支部の会員は毎週PCが送付されてくるので、この記事を見ていたであろう。1912年創刊の『布哇報知』（現在名、『ハワイ報知』）や『日布時事』において日本の戦後の混乱した社会状況、に報道されている記事の有無については筆者は調査しては無く、断定は出来ないが、「パンパン」といった女性たち、米兵と交際する日本女性、「戦争花嫁」の記事は当然掲載されていると思われるので、アメリカ流の派手な服装で、パーマをかけ、派手な化粧をして、義父母への「孝行」のかけらも無い「戦争花嫁」とマスコミで報道された「夜の女」「パンパン」といったものが結びついて、ハワイにおいても日本のステレオタイプが踏襲され、増幅されたのではないか。

これまでキムラの調査をもとに論じてきたように、「戦争花嫁」は日系コミュニティにおいて、あまり歓迎された集団ではなく、コミュニティの成員との人間関係も良好でないことが明らかになった。これは「戦争花嫁」と日系コミュニティの成員である婚家の義父母・義兄妹の相互の生育環境の違い、価値観の違い、同じ文化背景から来る問題、そして日本で形成されたステレオタイプがハワイでも踏襲され、偏見が増幅されたことなどがその原因となっている。

最後に「戦争花嫁」と日系「コミュニティ」の両者に関係する重要な点のうち、「戦争花嫁」がアメリカに入国した1950年代において、「戦争花嫁」と「日系人」のステレオタイプ形成に影響を及ぼしたと思われる、ある映画を巡る動きについてはじめに考察する。そして次に、両者に関連する最も新しい重要な問題として浮上してきた、「戦争花嫁」の歴史的評価にかかわる「全米日系人博物館」を巡る問題について議論をし、問題提起をしたい。

## (2) 「戦争花嫁」の受け入れ

### a) ステレオタイプを巡って～日系人の立場から～

日系アメリカ人は太平洋戦争が始まると「敵性外国人」として扱われ、1942年2月にはローズベルト大統領により行政命令9066号が発令され、ワシントン、オレゴン、カリフォルニア州に居住する約11万人の日系人が強制立ち退きを強いられた。はじめに15ヶ所に設置された仮収容所に集められ、その後、10ヶ所に設置された「強制収容所」に収容され、終戦まで収容所での生活を余儀なくされた。日系人はこうした辛苦辛勞をしのいで、ようやく少しずつホスト社会に受け入れられるようになってきただけに、収容所生活から開放され、再定住をしてからも、自分達がホスト社会からどのように見られているのか、ということは大きな関心事となった。そこでマスコミ、書籍、映画などで日系人がいかに報道され、記述され、表現されているのか、ということに敏感に反応するようになった。

ここでは「戦争花嫁」に関連する新作映画などを報道した『パシフィック・シチズン』の記事を検証し、「戦争花嫁」が入国し始めた1950年代初期に、日系コミュニティが「戦争花嫁」問題をどう捉えていたのか、「戦争花嫁」問題が自分達、日系人像の形成にどのような影響を与えているのか、といったことについて、その報道を検証しながら探してみたい。

「戦争花嫁」のアメリカ入国が始まり、日系コミュニティでも見かけるようになると、「戦争花

嫁」はどういった人達なのか、うまく自分達とやってゆけるのであろうか、ということばかりでなく、「戦争花嫁」がアメリカ社会でいかに見られるのか、ということに日系人は敏感にならざるを得なくなった。そうした折、アメリカ兵と日本女性の恋物語を描いたハリウッド映画『東は東』(1952)が山口淑子主演で製作されることになり、日系コミュニティにおいて大きな話題となった。PCには1950年だけでも6/6, 6/17, 7/8, 8/26に関連記事が掲載されている。また、時をほぼ同じくして、『ゴー・フォー・ブローク (あたって砕ける)』(1951)が映画化されることが決まった。この映画は第二次世界大戦中、ヨーロッパ戦線で日系二世のみで組織された442部隊が活躍し、多くの死者を出しながらもアメリカへの忠誠心を示す為に闘った部隊の活躍を映画化した作品である。このことについては1950年7月8日のPCのコラム「二世・USA：ハリウッド便り」において、詳述されている。この記事では当時渡米中であった女優山口淑子が映画『東は東』に出演が決定したことをとりあげると共に、製作予定の『ゴー・フォー・ブローク』の映画も完成すれば人気を博すだろう、と書いている。この記事から判断すると、日系人、日本人を取り扱ったハリウッド映画が、どのように自分達日系人や日本人を描いているのか、それをホスト社会がどう見るであろうか、ということが多くの日系人にとっての大きな関心事であったことが窺える。

また、映画『東は東』についてPCのコラム「二世・USA：ハリウッド経由ラブストーリー」(1951年7月14日)では、この映画は単に現代版蝶々夫人ということだけではなく人種偏見を考へる映画である、というプロデューサーの製作意図を紹介している。そして日本人に対する人種偏見を少なくさせるには『ゴー・フォー・ブローク』と並んでこの映画は非常に価値のある映画であると指摘し、この2つの映画は自分達日系人への否定的なイメージを払拭し、新しい肯定的なステレオタイプを形成させてくれるような映画であると絶賛している。「戦争花嫁」に対するアメリカ人のステレオタイプがどう映画で表現されているのか、そうした描き方や表現したことに対するアメリカ人の反応はどうか、それが自分達、日系人にとってどういう影響を与えるのか、といったことへの関心の高さを物語る記事を更に追ってみよう。

1951年11月3日のPC、「二世・USA：GIと『戦争花嫁』」のコラムでは「戦争花嫁」のアメリカ社会での受止められ方に関連して書いている。アメリカ兵が日本女性と結婚して入国することにより、アメリカ人女性の結婚の機会がそれだけ奪われるのではないかと懸念も一部にあるが、大方の意見としてアメリカ社会は「戦争花嫁」を受け入れているのではないかと記している。それを裏付ける話として記者は、ロングビーチの映画館での映画『東は東』に対する観客の反応を書いている。この記事よると映画の最後のシーンで看護婦妙子と米兵ジムの仲を裂こうとした意地悪なアメリカ人女性に対して、夫ジムの弟マイケルが2回殴打するシーンがあるが、ロングビーチで上映中にこのシーンで観客から大きな拍手がおこったとのこと。これは国際結婚をして渡米してきた日本女性に同情的だったことを物語るものではないか、そして一般大衆がこうした問題に対して、寛容になってきたことの表れではないか、と記者は分析している。更に続けて、異人種間結婚を禁止したカリフォルニア州法が1948年に破棄されてから異人種間結婚が非常に増えた、ということにはなっていないので、こういう映画の影響で国際結婚の数が急速に増加するということを不安に思う必要は無いと最初に指摘し、「戦争花嫁」の入国を認めることが、日本人移民の受け入れを禁止してきたこれまでの帰化政策の見直しを促進させる方向に導く、と結んでいる。こうした一連の記事はJACLの反差別委員会の方針を受けて、「戦争花嫁」入国問題を新たな日本人移民の受け入れや一

世の帰化権、市民権の獲得運動を見据えた運動としてJACLが捉えていることを示している。注目すべき記事として、同じコラム「二世・USA：日本人『戦争花嫁』」（1951年12月1日）に掲載された記事を最後に示したい。この記事によると、『東は東』は観客の反応も上々であり、大衆からの支持があると判断して、戦争が始まってからタブー視されてきた「日本人 (Japanese)」という語をタイトルに入れても客からのクレームもつかずに、チケットの売れ行きにも影響を与えないだろうと製作会社は判断し、題名の変更を決定した、ということである。それまでは「日本」「日本人」という言葉は日系人にとっては一種の呪いのようなものであり、日本人であるが故に排斥され、差別されてきた。それだけにそうした民族性を隠すことにより、ホスト社会から受け容れられると多くの日系人はこれまで思っていたのである。しかし時代も変わり、ロングビーチでの観客の好意的な反応から、「日本」「日本人」へのアメリカ人の拒否反応もなくなったようだと判断して、映画の題名を『日本人戦争花嫁 (Japanese War Bride)』と変更して大丈夫であり、かえってアピールするだろう、ということになったのだという。こうしたいくつかの新聞記事は、日系コミュニティが「戦争花嫁」の受け入れ問題を自分達自身のホスト社会での受け入れ問題として捉えると同時に、今後の日系人の権利獲得の突破口として捉えていたことを示している。

#### b) 全米日系人博物館と「戦争花嫁」

終戦後の連合軍による占領期に日本女性は8,381人のアメリカ兵及び軍属と結婚したが、その人種的な内訳は白人73%、二世15%、黒人12%となっており、二世兵士とは1,300人が結婚したことになる<sup>68)</sup>。1952年のサンフランシスコ条約締結後も多くの日本女性がアメリカ軍兵士及び軍属と結婚して海を渡り、何らかの形で日系コミュニティと関わりをもつて生活をしてきた「戦争花嫁」も多い。ことに年齢を経るにつれて日本への郷愁も高まり、知人などが住んでいる心強さもあって、西部沿岸諸州の日系コミュニティのある都市部に転住する「戦争花嫁」も多くなってきた、とは「戦争花嫁」からよく聞くことばである。

日系コミュニティとの関わり合いについて1999年の筆者の調査を見てみよう。「Q.20 あなたが現在所属する団体、サークルがあれば記入し、日系人会員の割合を書いて下さい」という質問にオーストラリア人を除外した78名のうち70%の人が回答した。全体で94団体名が記入されていて、うち日系人会員の割合の多い団体、サークル名称は78団体・サークル(83%)名が記入されており、日系コミュニティとの関わり合いのほうに圧倒的に多いことを物語っている。これまで明らかにしてきたような過去に日系コミュニティの中で、日系人と色々な問題があったにしても、「戦争花嫁」の多くは日系コミュニティ内で、日本の文化にふれたり、日本人・日系人と共に時を過ごすことの「心地よさ」を感じているのではないか。これは以前に比べて、日本人としてのアイデンティティが強くなり、「日本回帰」の現象が年齢を重ねるに従って、見られるようになってきたことも、その理由のひとつであろう。

2000年8月26日、ロサンゼルスのリトルトーキョーにある「全米日系人博物館」(以下「博物館」)において「国際結婚した日本女性」と題したシンポジウムが開かれた。1992年に開館した「博物館」にとって初めて「戦争花嫁」をテーマにした催し物であり、当日約130人が来場した。当日参加のパネリストは「戦争花嫁」2人、「戦争花嫁」の娘で大学教員2名、劇作家1名、そして司会の女性史研究の大学教員の6名で、5人のパネリストがそれぞれの体験を通しての講演を行い、講演終了

後、来場者とディスカッションを行った。2000年8月31日の『羅府新報』によると、130名余りの来場者たちからパネリストへの質問や意見が出されたが、いまだに国際結婚に対して社会が否定的に捉えていて、差別、偏見が残っていることを指摘するような意見が参加者から次々出されたという。これまでに「博物館」では「戦争花嫁」に関する展示、シンポジウムなどは一度も開催されることがなかったので、このシンポジウムは画期的なことである。

「博物館」の活動目的は、1) 日系人とあらゆる人種のアメリカ人との掛け橋、2) 日系人と日本人の掛け橋、そして3) 日米両国の人々のところに架かる掛け橋を築くことを願っている、と「博物館」のパンフレットには記してある。この掛け橋の中には「日系人と戦後アメリカに渡った『新一世』との掛け橋」は含まれていない。「博物館」発足当時から、本来あるべきこの4つ目の掛け橋がなかったために、同じアメリカで暮らす日本をルーツとしたもう一つの集団との相互理解がなされなかった。1998年6月19日のPCの「新1世：新しい日系アメリカ人」と題した記事では、第二次世界大戦前に日本から渡米した一世とその子孫たちの日系アメリカ人と戦後、日本からアメリカに渡った一世とその子孫たちの間にある溝が埋められていないことを指摘し、現在、日系コミュニティは「文化的生存と復興」が困難になってきている、という厳しい問題に苦悩していることが述べられている。二世の老齢化と三世以降の世代の民族的遺産への無関心により、コミュニティ内の社会活動や文化活動が低迷し、「文化的生存と復興」が困難になっている。従ってコミュニティのほうで新一世を取り込まない限り、文化的生存は難しい、ということを強調している。同時にこの記事は両者にある溝について、埋めることがそう容易ではない現実がある点も指摘している。新一世は日系アメリカ人を、かつての『棄民』とその子孫たち」という眼で見ることがあるのに対し、日系アメリカ人は新一世を「いつも日本人だけで固まっていてアメリカ社会に溶け込もうとせず、日系アメリカ人の歴史や文化に興味を示さない」として冷ややかに見ていることを、この記事ではお互いの問題点としてあげている。

こうしたことを考慮に入れると、「博物館」のもう一つの大きな使命、目的として両者の相互理解を図るプログラムを作成し、その企画を実行することが大切である。そうした観点から「博物館」として恐らく初めて、新一世の代表格の「戦争花嫁」とその子供たちをテーマにしたシンポジウムを開催したことは、遅きに失した感は否めないがその第1歩として評価できる。このシンポジウムのあと、パネリストの一人の日系国際結婚親睦会会長のスタウトは、以前から抱いていた構想をこれを機に実現させたい、という気持を更に強めた。それは「戦争花嫁」のアメリカ入国後の歴史を残す為に、「博物館」内に「戦争花嫁」の常設の展示コーナーを設置してもらい、同親睦会の設立の第1の目的である、「戦争花嫁の足跡を歴史を残す」ことを実行に移したい、という構想である。自分達が異国の地で必死に生きてきた証を形として残したい、という願いが出てくるのは極めて自然なことである。そこでスタウトは、同会のニューズレター（2000年9月号）に、「アメリカ社会そして日系社会又日本に残してきた家族たちに『頑張りました』と力強く訴え、書類や写真ドキュメントによって（それを）見て頂く時がきた」ということを、「夢ではなかった夢」と題した文で記している。その中で会員の皆様へのお願いとして、「国際結婚に関する物を引き出しの奥から又クローゼット（の）中なら引っ張り出し集めておいて下さい。（中略）（1）結婚式の写真、（2）夫から受けたラブレター、（3）記念写真、（4）国際結婚に関する書類、（5）歴史に残りそうなもの、（6）家族写真、（7）結婚請願書、（8）親兄弟からの手紙、（9）その他」ということを記

している。スタウト氏によると少しずつ、そうした物が会員から集まってきているという。これは後述する「戦争花嫁」の歴史を展示する、「戦争花嫁」常設展示コーナーの設置に向けての「親睦会」側の取り組みや決意を示すものである。

本章の最後に強調したいのは、日系文化遺産の殿堂である「博物館」に今、強く求められていることは、同博物館の3つの設立目的に加え、新たに第4の目的を掲げて、日系紙のPCも指摘した日系コミュニティと新一世の間の溝を埋める為の努力を払うべきである、ということである。それを具体化するものとして、2000年8月に開催した前述のシンポジウムの次なる企画として、「戦争花嫁」の常設展示コーナーを「博物館」内に設置し、戦後の日系コミュニティにおいて、又、アメリカ社会において貢献してきた「戦争花嫁」の足跡を形として残すことから、取り組まなければならない、ということを強調したい。

## V. おわりに

### 1. 受容の時代へ ～今、求められているもの～

これまで見てきたように、「戦争花嫁」がアメリカに到着した当時は、すでに述べたように1950年代の保守化の進む冷戦の時代であった。花嫁学校で学んだアメリカの民主主義を信じ、アメリカ人の妻としての覚悟を決めて海を渡った彼女たちであったが、日系コミュニティのある西海岸諸州やハワイに移り住んだ「戦争花嫁」の場合、婚家や日系コミュニティで体験したのは「花嫁学校」で学んだことと異なることが度々あった。自分たちにつけられたステレオタイプのために、日系コミュニティではしばしば差別的な扱いを受け、排斥され、「ヨソ者」の「戦争花嫁」は仲間に入れてもらえないこともしばしばあった。そこで「戦争花嫁」同士が集まっては子供の教育や家庭の問題などの情報交換をして、一世の女性がそうであったように、「こどものために」必死になって生きてきた。アメリカ社会は1950年代の半ば以降、黒人の公民権を求める運動が展開されるようになり、南部の各地で起こった公民権運動は、人種平等の観念をアメリカ社会に浸透させる役割を果たした。この運動はほかのマイノリティや女性にも大きな影響を及ぼし、民族意識や男女平等の意識の高揚を促した。

しかし日系アメリカ人はこうしたマイノリティの権利獲得運動を1960年代の初めから積極的に繰り広げることはなく、マイノリティの成功例としてみなされるような「モデル・マイノリティ」を目指して、あくまでも主流社会への同化を目指していた。これは「強制収容所」体験からの教訓として、二世が「120%のアメリカ人」を目指すことを求めた結果であった。そこで多くの二世は日系コミュニティにおける「戦争花嫁」が日系アメリカ人の評価を下げることを懸念し、「あの人達と自分達は違う」として一線を画して、「戦争花嫁」集団を隔離しようとした。しかし1960年代後半になると大学生の年代になった三世は、二世の「モデル・マイノリティ」志向に疑問を抱く者も多く、アジア系アメリカ人運動に誘発されるようになった。1970年代にカナダが政策として多文化主義（マルチカルチュラリズム）を取り上げたが、アメリカにおいも人種的マイノリティの自己アイデンティティの確立を目指す運動と結びついた。日系コミュニティにおいては、三世に見られるようなアジア人意識の高揚やサンノゼ仏教会で見られる「サンノゼ太鼓」に象徴されるような

「日本回帰」の現象をうみ、日系コミュニティから「戦争花嫁」を排斥するようなことは次第に影をひそめるようになり、偏見に基づく差別的な言動も少なくなってきた。

20年以上にわたってロングビーチの「戦争花嫁」及びその家族と係わってきて、筆者自身、多くの知見を得てきた。日系コミュニティにおける盆踊りなどで20年以上も前に、「戦争花嫁」の子供たちと三世、四世の子供たちがコミュニティにおいて盆踊りなどの行事の時ばかりでなく、剣道、日本舞踊などといったおけいこごとでも、共に活動し、今でも一部は友人付き合いをしているようである。このことは一世、二世たちが示した偏見や差別も現在ではほとんどなくなっている、ということをお話しているように思える。いま、こうした時代を迎えたからこそ、三世、四世たちと共に、「新しい掛け橋を作る」というのではなく、二世と「戦争花嫁」自身が健在なうちに、偏見をなくし、共に同じコミュニティの成員として理解を深め合って、その「掛け橋」を作って欲しいと願っている。そうした意味においても全米日系人博物館が「戦争花嫁」の常設展示コーナーを設け、「戦争花嫁」の足跡を知り、理解を深めることが今、求められているのではないか。

2000年10月に筆者はこうした趣旨の文を日系国際結婚親睦会のニューズレターに日本語で投稿すると共に、全米日系人博物館館長にも「戦争花嫁」関連の資料の常設展示コーナー設置を求める同様の英文の要望書を投函した。筆者の投稿文に対して、感謝の手紙をニュー・メキシコ州在住の「親睦会」の会員の「戦争花嫁」から頂いた。また2001年9月に「博物館」の展示などの責任者である主任学芸員に筆者が同博物館で面談し、この問題について再度要望した。この面談の数日後にシアトル在住の「親睦会」のスタウト会長にこの主任学芸員から電話があり、2002年6月には両者が今後の方向性について話し合う、ということが取り決められたとこのことを第42回海外日系人大会に出席するために2001年10月に来日した会長より伺った。

スタウト会長は2001年10月23日に東京の国際協力総合研究所で開かれた上述の海外日系人大会の代表者会議において「戦争花嫁」の現状と今後について以下のように報告した<sup>69)</sup>。

「社会人そして立派な（アメリカ）市民として前向きに生き、自分たちが生きてきた足跡を歴史に残してから逝きたい。（中略）最後に国際結婚をした会員の平均年齢は72歳にもなりました。これからは会員は何を望んでいるか？と問われたら『自分たちの足跡を無駄にしたくない、何等かの形で国際結婚をした日本女性の歴史を、日本の博物館そしてロサンゼルスにある日系博物館に残したい』と望むであろう。」（原文のまま）

「戦争花嫁」のこうした切なる願いが、これまで「戦争花嫁」を排斥することの多かった日系人コミュニティをようやく動かし始め、「博物館」も「戦争花嫁」を含む戦後渡米した新一世の歴史を見つめなおす機運がようやくわずかではあるが見え始めた感がある。今後の動向に更に注目してゆきたい。

## 2. 今後の研究課題

本論文においては「戦争花嫁」の夫への調査の結果については、テーマから外れることもあり、検討を加えていない。しかし今後、夫から見た「戦争花嫁」についても検討を加えることが、幅広い「戦争花嫁」研究を行うには大切である。また「海を渡った『戦争花嫁』」についての研究と共に、「海を渡れなかった『戦争花嫁』」についても同じことが言える。戦後の混乱期に色々な事情により、日本において結婚にまで至らなかったケースも多くあった。こうした「海を渡れなかった日

本女性」の研究やこうした女性から産まれた「混血児」の問題についても、「戦争花嫁」研究において今後の大きな検討課題である。更に付け加えるならば、今回の研究が「戦争花嫁」とこれまでの日系コミュニティについて論じてきたが、それは一世、二世とのかかわりの中での議論であった。しかし今後は新一世及びその子孫たち、日系アメリカ人三世以降の世代、「戦争花嫁」の子孫の世代といった様々な集団との関連での「戦争花嫁」研究も視野に入れて行うことや、女性史という立場で他の民族集団やアメリカ社会との関連で研究をすすめることも必要である。

## 註

- 55) 植木 武・新田文輝・鈴木一代、『海を渡った花嫁たち——戦争花嫁のプロフィール——』平成8年度～10年度化学研究費補助金(国際学術研究)研究報告書 課題番号08041084、2000年、86頁。これによると被調査者109名のうち1959年までに渡米した人は91名。その内訳は1947～1950年までは各1名、1951年2名、1952年11名、1953年3名、1954年5名、1955年10名、1956年19名、1957年18名、1958年9名、1959年11名となっている。
- 56) 有賀夏紀、『アメリカフェミニズムの社会史』勁草書房、1988年、90-93頁。
- 57) 「3千人の花嫁、太平洋を渡るニッポン・ムスメ」『サンデー毎日』1957年7月28日号、4-11頁。
- 58) Glenn, Evelyn Nakano, *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American Women in Domestic service*, Philadelphia: Temple University Press, 1986, p.82
- 59) Nakano, Mei T, サイマルアカデミー翻訳科訳『日系アメリカ女性: 三世代の100年』、サイマル出版会、1992年、91頁。
- 60) Nakano、106頁。
- 61) Nakano、204頁。
- 62) Nakano、205頁。
- 63) Kimura, Yukiko, "War brides in Hawaii and Their In-Laws," *The American Journal of Sociology*, Vol. L XIII, July 1957, p.71. 尚、表2及び表3はキムラの記述をもとに筆者が作成したものである。
- 64) Kimura, p.71.
- 65) Connor, John W., *A Study of the Marital Stability of Japanese War Brides*, R & E Research Associates, Inc., 1976, p.57.
- 66) Kimura, p.73.
- 67) "Honolulu Report: The War Bride Cometh," *Pacific Citizen*, 12/23/1950.
- 68) "Report 1,300 Nisei Soldiers Married Japanese Brides During Occupation Period" *Pacific Citizen*, 9/27/1952
- 69) 国際結婚親睦会、『ニューズレター』40号、2001年12月、3頁。

## 参考文献

- 有吉佐和子、『非色』中央公論社、1964年
- 有賀夏紀、『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房、1988年
- Chuman, Frank F., *The Bamboo People: The Law and Japanese Americans*. Del Mar, CA: Publisher's Inc., 1976.
- Connor, John W., *A Study of The Marital Stability of Japanese War Brides*, R & E Research Associates, Inc., 1976.
- ドウス昌代、『敗者の贈り物・RAA(特殊慰安施設協会)』講談社、1979年
- 江成常夫、『花嫁のアメリカ』講談社、1984年

- Fujita, S.S. and O'Brien, *Japanese American Ethnicity*. University of Washington Press, 1991.
- Glenn, Nakano Evelyn, *Issei, Nisei, War Bride : Three generations of Japanese American Women in Domestic Service*, Temple University Press, 1986.
- 早川紀代、「強制連行と『従軍慰安婦』」藤原 彰・栗屋憲太郎・吉田 裕編『昭和20年／1945年』小学館、1995年、148-151頁
- Houston, Velina Hasu, "Tea." In *Unbroken Thread*, ed. Roberta Uno, 155-200. Boston: University of Massachusetts Press, 1993.
- Ichioka, Yuji, "Japanese Immigrant Women in the United States, 1900-1924," *Pacific Historical Review* 49, 1980.
- 猪野健治、「特集・日本人と戦後30年：白トラスト・RAA 〔創〕」総合評論社、1974年
- いのうえせつこ、『占領軍慰安所：国家による売春施設』新評論、1995年
- 伊藤一男、「座談会 あめりか花嫁の詩——シアトルの日本人女性と伊藤一男」『明治海外ニッポン人』PMC出版、1984年、付録1-7頁
- 伊藤 悟、「占領軍がやってきた」藤原 彰・栗屋憲太郎・吉田 裕編『昭和20年／1945年』小学館、1995年、214-217頁
- 岩井泰子「サンフランシスコにおける日系人コミュニティ」『社会科学研究年報』龍谷大学社会科学研究所 12 別冊、1982年、90-100頁
- 川島浩平、「『戦争花嫁』——アメリカ女性史におけるその意義」『欧米文化研究』第6号、1991年、27-46頁
- 川島高峰、『敗戦・占領軍への50万通の手紙』読売新聞社、1998年
- 河原崎やす子、「M. Butterfly とステレオタイプの錯綜」『英文学論考』立正大学英文学会第19号、1993年、41-55頁
- Kimura, Yukiko, "War Brides in Hawaii and Their In-Law," *The American Journal of Sociology*, Vol. L XIII, July 1957, pp.70-76.
- Kim, Bok-Lim, "Asian Wives of U.S. Servicemen : Women in Shadows," *Amerasia* 4 : 1, 1977, pp.91-115.
- Kitano, Harry H.L., *Japanese Americans : The Evolution of a Subculture*, 2nd ed., Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1976
- Lark, Regina F., "They Challenged Two Nations : Marriages between Japanese Women and American GIs, 1945 to the Present." Ph.D. diss., University of Southern California, 1999.
- Levine, G.N. and Rhodes, C., *The Japanese American Community*, Praeger, 1981.
- Masaoka, Mike & Hosokawa, Bill, *They Call Me Moses Masaoka : An American Saga*. New York: William Morrow and Company, 1987.
- Matsumoto Valerie J., *Farming the Home Place : A Japanese American Community in California 1919-1982*, Cornell University, 1993.
- Miyamoto, S. Frank, "An Immigrant Community in North America," in Hilary Conroy and T. Scott Miyakawa (eds.), *East across the Pacific*, Santa Barbara, Calif. : ABC Clio Books, 1972.
- Nakano, Mei T., *Japanese American Women Three Generations 1890-1990*, Mina Press and National Japanese Americans Historical Society, 1990.
- 、サイマルアカデミー翻訳科訳、『日系アメリカ女性：三世代の100年』サイマル出版会、1992年
- Nitta, Fumiteru, "Kokusai Kekkon : Trends in Intercultural Marriage in Japan." *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.12 (1988), pp.205-232.
- Saenz, Rogelio, Hwang, Sean-Shong and Aguirre, Benigno E., "In Search of Asian War Brides," *Demography*, Vol.31, No.3, August 1994.
- Schnepf, Gerald. J & Yui, Agnes Masako, "Cultural and Marital Adjustment of Japanese war Brides," *American Journal of*

*Sociology*, LXI (61), 1955. pp.48-50.

Shukert, Elfrieda Berthiaume, and Barbara Smith Scibetta, *War Brides of World War II*, Navato, CA., Presidio Press, 1988.

Straus, Anselm. L., "Strain and Harmony in Japanese-American War-Bride Marriages," *Marriage and Family Living*, 1954 May, pp.99-106.

Suenaga, Shizuko, "Marriage Motivations of Japanese War Brides : Soico-Historical Approach, *The Annual Review of Migration Studies*, Vol.1, March 1995, pp.133-161.

Tamura, Keiko, "Border Crossings : Changing Identities of Japanese War Brides." *The pacific Magazine* No.8, pp.43-47.

Tinker, John N., "Intermarriage and Ethnic Boundaries : The Japanese American Case," *Journal of Social Issues* 29, 1973, pp.49-65.

植木 武・新田文輝・鈴木一代、『海を渡った花嫁たち——戦争花嫁のプロフィール——』平成8年度～平成10年度  
科学研究費補助金（国際学術研究）研究報告書 課題番号08041084、2000年

上野千鶴子、『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年

Williams, Teresa K., "Marriage between Japanese Women and U.S. Servicemen since World War II," *Amerasia Journal* 17 : 1, 1991, pp.135-154.

安富成良、『『戦争花嫁』と日系コミュニティ（Ⅰ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ』『嘉悦女子短期大学  
研究論集』、78号、2000年、177—199頁

——、『『戦争花嫁』と日系コミュニティ（Ⅱ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ』『嘉悦大学 研究論集』、  
80号、2001年、45-61頁

山本剛朗、『日系アメリカ人コミュニティの研究枠組みに関する一考察』『関西学院大学社会学部紀要』54、1987年、  
45-64頁

## 史料 1

## 日本の新聞・雑誌の記事の見出しより

以下に示すのは日本の新聞記事については1945年8月15日から1959年12月31日までの『朝日新聞』、『読売報知(現、『読売新聞』)』、『毎日新聞』が報道した記事である。雑誌記事については同時期に発行された雑誌のうち「駐留軍」、「戦争花嫁」、「国際結婚」、「特殊慰安施設協会(RAA)」、「基地の女」、「夜の女」、「街の女」、「パンパン」といったキーワードをもとにあらゆる週刊誌、月刊誌、季刊誌の中から関連記事を渉猟したものである。

## A. 戦後の占領期の進駐軍兵士を巡っての社会状況

## 1. 連合国軍の進駐にあたって

- 1) 「脱ぐな心の防空服、女子は隙なき服装、指示あるまで燈火管制」(朝日新聞1945年8月17日)
- 2) 「あり得ぬ略奪暴行、履き違へるな“保障占領”」「利き過ぎた子女疎開、神奈川で回覧板から混乱招く」(朝日新聞1945年8月19日)
- 3) 「上陸する米兵達よ、守れ厳重な規律 比叡山麓で語る神父バーン師 大和撫子の心を知れ」(朝日新聞8月19日)
- 4) 「デマに踊るは愚、徒らに混乱すれば世界の物笑ひ」(読売報知1945年8月20日)
- 5) 「連合軍本土進駐前後の心得、暴行略奪など杞憂、冷静に職場守れ、成行は町内、部落会長を通じて指示」(読売報知1945年8月23日)
- 6) 「控へよ婦女子の独り歩き、ふしだらな服装は慎まう」(読売報知1945年8月23日)
- 7) 「外国兵近づくとも、毅然、冷静に扱へ、警保局から全国へ“動揺無用”を通達」内務省警保局からの6項目にわたる通達紹介(朝日新聞1945年8月23日)

以下の3項目は注目に値する。

4. 特に婦女子は日本女性としての自覚をもって外国軍人に隙を見せるようなことはいけない
  5. 婦女子は淫らな服装をせぬこと、また人前で胸をあらはしたりすることは禁物である
  6. 外国軍人が「ハロー」とか「ハイ」とかあるひは片言まじりの日本語で呼びかけても婦女子は相手にならず避くること
- 8) 「若き女性の指針、聡明に敗因を反省、世界の注視に応へよ 民族の純潔」(読売報知1945年8月24日)
  - 9) 読売報知の下欄の広告欄に「都民に告ぐ 東京都長官 広瀬久忠」という通達を紹介する記事「戦争が終わったからといって、ほっとした甘い気持ちで浴衣がけの着流しや、だらしない風体をする時ではない。特に婦人は折角身について来たモンペを常用し、男子は機敏な動きに便利な身なりでうんと働ませう。」(読売報知及び朝日新聞1945年8月26日&9月1日)
  - 10) 「勤労女性も頑張る横須賀、整然と終わった将兵復員輸送、徒な不安は無用、だが隙をみせるな、横浜、進駐区域の婦女子に警告」(朝日新聞1945年8月27日)
  - 11) コラム「神風賦(現在の天声人語)」より「(戦時中、女性の活躍は目覚ましいものがあった)ところで戦争終結とともに一、二の女性はすぐモンペを脱いで浴衣がけで街を歩いたとか、派手な服装をして電車に乗ったとかいう噂を聞く」として「外国兵が来ることも考え合わせて服装問題は一躍女性問題としても考慮すべきであらう」と若い女性に対して自重を促すコラムを掲載している。(朝日新聞1945年8月29日)
  - 12) 「婦女子は徒らに恐れるよりは毅然たる態度で、飽迄反発することが肝要であるし、又其の方が却って難を逃れることが多い」(『埼玉新聞』1945年9月14日)

- 13) 「ボクらの見た米軍、まじめに働き、よく遊ぶ。それに引きかへ、悲しい風景」(朝日新聞1945年9月29日)
- 14) 「ほんのりと国際色・銀座復興祭り」舗道に沿ってさげられた短冊にも横文字が書かれ国際色濃厚。広場では RAA のダンサーが和服で復興踊りを踊った。(朝日新聞1946年4月21日)
- 15) 「昔懐かし、銀座夜の装ひ」7月20日からの納涼祭に進駐軍への感謝の言葉が書かれている約500のボンボリを飾り、祭終了後進駐軍に贈呈する旨を紹介(朝日新聞1946年7月17日)
- 16) 「きょう占領の7年終る」(毎日新聞1952年4月27日)

## 2. 特殊慰安施設協会(RAA)設立と公娼廃止後の「性」を巡る社会状況

- 1) 「職員事務員募集 募集人員50名 男女ヲ問ハズ 高給優遇ス 外ニ語学ニ通ズル者及雑役若干名(中略)京橋区銀座七ノ一 特殊慰安施設協会 電話銀座九一九・二二八二」(朝日新聞 広告 8月29日&31日)
- 2) 「進駐軍の慰安施設」神奈川県最初の慰安施設の記事(朝日新聞1945年8月30日)
- 3) 「急告・特別女子従業員募集、衣食住及高給支給、前借ニモ応ズ、地方ヨリノ応募者ニモ旅費ヲ支給ス 東京都京橋区銀座七ノ一 特殊慰安施設協会」(毎日新聞1945年9月4日)
- 4) 「物珍しさに出入りするな 進駐軍との間違ひ避けよ、一部米兵の暴行 抗議提出 注意が肝要」(朝日新聞1945年9月3日)
- 5) 「誤解招く娘の笑顔、粹な素足も挑発的、応接は事務的に受け流せ」(朝日新聞1945年9月7日)
- 6) 「若い女性へ」と題した詩人の深尾須磨子の投稿。若い女性の服装やマナーの欠如について注意を喚起させた。(朝日新聞1945年9月10日)
- 7) 「女性と娼」と題した読者からの投書。「敗れたとはいへ誇りは捨てるな。浅間しい姿は慎まう」と深尾と同じ論調で若い女性に服装、行動面での自重を促す。(朝日新聞1945年9月11日)
- 8) 「吉原」について読者の投書。公娼の存在を嘆いている。(朝日新聞1945年10月2日)
- 9) 「盛り場はどうなっている」と題し、銀座、浅草、上野、新宿その他の盛り場での公娼や風俗についてレポート。(朝日新聞1945年10月25日)
- 10) 読者からの「声」の欄で「チューインガムを噛みながら米兵に腰を抱かれつつ嬉嬉として銀座街頭を歩く派手な化粧の娘たち」についての投書(朝日新聞1945年11月3日)
- 11) 「占領地の女性、近より難い娘達、退屈至極な敗戦日本の姿」元朝日新聞ベルリン特派員守山義雄氏の投稿記事。(朝日新聞1945年12月19日)
- 12) 読者からの「声」の欄で「気品高き態度」と題し長崎の在日15年のカトリック神父からの投書で、「街頭の女性」などの様子を見て「伝統的な日本女性の美しい態度がなくなった」と嘆いている投書。(朝日新聞1946年1月10日)
- 13) 「近く公娼廃止へ、事後対策に警視庁が腐心」(朝日新聞1946年1月11日)
- 14) 「公娼けふから廃止、“人身売買” 嚴重取り締まり」(朝日新聞1946年1月15日)
- 15) 「開放される『籠の鳥』、都下の公娼けふ廃業」「闇に咲く花、殆どが都会の女達、オカッパ娘の転落の道」(読売報知1946年1月15日)
- 16) 「『マ司令部』公娼廃止令、24日に政府に対して命令」「指定する銘酒屋、全国の娼妓1万4百人」という見出しで1月21日のアーレン大佐名で日本政府に公娼制度の存在を認める法規を破棄するように求める覚え書きを発表した旨の記事。(朝日新聞1946年1月25日)
- 17) 「タイピストもまじる街の天使、地下室を根城の18名検拳」(読売報知1946年1月30日)
- 18) 「大部分は高女卒、『夜の女』親達に引き渡し」(朝日新聞1946年1月31日)

- 19) 「女性の開放」と題した「声」の欄への投書「夜の女18名検挙」というニュースを受けて投稿者が「毒々しい化粧をした若い女性」の様子を嘆いている記事。(朝日新聞 1946年 2月 5日)
- 20) 「『夜の女』、300名検挙」(朝日新聞 1946年 3月 11日)
- 21) 「公娼は闇に化けている、廃止令下 彼女らのうめき声」という見出しで、吉原の実情のみならず富山、石川の公娼についても言及し公娼廃止とは言うものの実際は存続していることを伝えている。(読売報知 1946年 2月 18日)
- 22) 「愛情の散歩ご法度、アメリカ兵にお達し」という見出しで公衆の面前で日本女性と肩を抱いて歩くことを禁止し、歩いていたら逮捕せよ、という通達が軍から出されたことを伝える記事。(読売報知 1946年 3月 23日)
- 23) 「愛情の散歩 罷りならぬ、米第八軍司令官 全軍に指令」「日本婦人の自粛を、西村保安課長談」(朝日新聞 1946年 3月 24日)
- 24) 「43名検挙、人前で愛情示した米兵」という見出しで掲載され、風紀を乱したということで軍が連合国兵士を検挙したことが記されている。(読売報知 1946年 3月 29日)
- 25) 「日本婦人の醜交を戒む、マ元帥書簡・米将兵の自重要望」(朝日新聞 1946年 4月 3日)
- 26) 「進駐軍相手の“桃色交驩”、犯せば日本人も厳罰」進駐軍相手の組織的売春行為に対しての5月8日に告示された、進駐軍司令部からの告示文を紹介。(朝日新聞 1946年 5月 9日)
- 27) 「米兵と温泉旅館」米8軍では熱海、湯河原、網代地域の日本旅館は衛生上の見地から今後進駐軍の軍人軍属には立入り禁止にする旨発表。(朝日新聞 1946年 5月 10日)
- 28) 朝日新聞では1946年 7/13、7/14、7/27に「夜の女」「闇の女」の検挙の記事が掲載されている。
- 29) 「“闇の女”へ新生の途、当局動く」全国で3万人いると言われていた闇の女の更生対策について内務省の風紀対策委員会で検討する旨の記述。(朝日新聞 1946年 9月 29日)
- 30) コラム「世相片々」で「ダンサー紅い陳情」という見出しで都下の21のダンスホール2500人のダンサーの代表者が都庁で“ダンサー税”の廃止を訴えた(朝日新聞 1946年 10月 2日)
- 31) 「賣笑の契約は無効、闇の女の防止も徹底」内務、文部、厚生三省の次官会議で対策を検討し地方長官に通牒した旨の記事。(朝日新聞 1946年 11月 15日)
- 32) 「闇の女扱い」日映ニュース婦人組合員2名が池袋駅で警官から闇の女扱いされ、吉原病院で強制的に検診を受けさせられた事件(朝日新聞 1946年 12月 6日)
- 33) 「対策に身分証明書、ヤミの女扱いに抗議」(朝日新聞 1946年 12月 7日)、「“女性を守る”デモ」(同新聞 12月 12日)、「外出にはぜひ証明書を、ヤミの女と間違われぬように」(同新聞 12月 14日)、「総監に抗議文、不当検診反対、女だけのデモ」(同新聞 12月 16日)
- 34) 「ヤミの女に厚生施設、各府県に2-3ヶ所設置、ヤミの女の保護対策に」「乱すな風紀、婦人警官取締りに出勤」警視庁保安部は今までの貸座敷や慰安所などの建物は旅館や下宿屋に転換させ、特殊飲食店として認められたところも従来の娼妓や私娼は自由意志でそこに下宿する、芸妓やダンサーなどの組合は本業だけで自活できるようにさせ、夜の女への転落を防ぐ旨、通牒したとの記事(朝日新聞 1946年 12月 8日)
- 35) 「“街の女”をなくそう、更生に民間団体を、サムズ大佐談」進駐軍の公衆衛生福祉担当大佐が、“街の女”が増え社会問題になっており全国に職業紹介所を設置することが必要である、との談話を発表(朝日新聞 1947年 1月 25日)
- 36) 「ヤミの女に更生寮、知らない性病、多い逃亡」(朝日新聞 1947年 3月 7日)

3. 駐留軍兵士との間に生れた混血孤児 (Occupied babies. G. I. Babies) 関連の新聞・雑誌記事

- 1) 「占領下の混血児たち」NYポスト東京支局員ベリガン氏投稿記事、『世界評論』1948年10月号
- 2) 「混血孤児 愛の手に育つ71名」(読売新聞 1950年 8月2日)
- 3) 「渡米できるように認知して、夫の米兵亡くした妻、愛児のために訴え」(毎日新聞 1952年 3月25日)
- 4) 「占領の落とし子たち 混血児収容所、子供を認知せよとの父親への訴状沙汰しきり」、『週間読売』1952年 4月1日号 p.27
- 5) 「孤児楽園 『エリザベス・サンダー・ホーム』訪問記」、『週間読売』1952年 4月1日号 p.29
- 6) 「敗戦の置土産、混血児と戦災孤児の現地報告」『サンデー毎日』1952年 4月6日号
- 7) 「蝶々夫人の子供たち、“GIベビー”の問題」『週刊朝日』1952年11月2日号
- 8) 「米国の養父の元へ、4歳の混血女児が空の一人旅」(朝日新聞 1953年 6月8日)
- 9) 「混血の子に市民権、初のワク外入国許可」(朝日新聞 1953年 9月9日)
- 10) 「悲劇の混血児が渡米、獄窓に子を恋う父を訪ねて」(毎日新聞 1955年 9月9日)

上記の新聞・雑誌を含め1959年12月までに70本の「混血孤児」の記事が掲載された。

(47年2月開設の「エリザベス・サンダース・ホーム」の沢田美喜さん関連の記事も多い)

4. 「基地の女」など(正式に国際結婚して夫の国へ行った「戦争花嫁」以外の女性を扱った記事)

- 1) 「ニッポンムスメ覚書」『サンデー毎日』1946年 7月14日号
- 2) 「GIの大和撫子調達問題」、藤原道子・大宅壮一他、『丸』1947年 5月号
- 3) 「外国人とニホンムスメ」、ファーマン、『改造』1951年11月号
- 4) 「国際女性(オフリミットガール)から見た進駐軍の生態」、林サチ子他、『丸』1952年 5月号
- 5) 「『蝶々夫人』占領版」、茂木照子、『文芸春秋臨増』1952年 6月
- 6) 「市の現状を見る、微罪届出が激増」朝日新聞 1952年 7月20日
- 7) 「ルポ ヨコスカ 日本のレッドライン」、神崎 清、『婦人公論』1952年11月号
- 8) 「立川基地でメイドを強制検診」毎日新聞 1953年 3月12日
- 9) 「世論を呼ぶ強制? 検診〜東京・立川基地の場合、人権蹂躪か、米駐留メイド検診の波紋」『週刊サンケイ』1953年 3月29日号
- 10) 「夜の女の青パス事件 富士の裾野にバッコする検診済みの女たち」『週刊読売』1953年 4月12日号
- 11) 「日本をむしばむ『売春』、“処理法を作ろう”、反対の声もかなりある」「もっと徹底的に取り締まれ 評論家 神崎清談」(朝日新聞 1953年 6月19日)
- 12) 「『夜の女』の追放」、「声」の欄の投書(朝日新聞 1953年 6月29日)
- 13) 「米軍将校に告ぐ、あなたこそ罪あるパパ、捨てられた日本の妻子の切言」『サンデー毎日』1953年7月5日号
- 14) 「ニュース・バスケット “オンリー” に愛情鑑札(佐世保市) テスト・ケースに非難ごうごう」『サンデー毎日』1953年 8月2日号
- 15) 「カメラ・ルポ 基地の女たち」『婦人朝日』1953年 9月号
- 16) 「日本ムスメとGIと青い鳥」、J. ミッチェナー、『文藝春秋』1955年 6月号
- 17) 「日本貞操の防波堤 R・A・A(進駐軍専用特殊慰安協会)」『週刊新潮』1956年 8月20日号

上記を含む30本の雑誌記事が1959年12月までに掲載されている他、新聞でも朝日新聞「地方の表情・軍事基地」1953年 9月4日、「日本の悩み・基地問題」1953年 9月15日；毎日新聞「外人記者の見た赤線基地・千歳、

麻薬と売春に曇る街」1953年10月29日、「基地さまざま①～⑧」1955年8月25日～1955年9月4日まで連載；読売新聞「現地に見た『基地の姿』、苦情と補償の実態」1953年6月26日、「連載今日の焦点・基地」1955年8月31日～9月1日などで掲載され基地周辺に働く女性たちと駐留軍兵士たちとの諸問題が提起されている。

## B. 進駐軍兵士との国際結婚を巡っての日本の反応

(進駐軍兵士との結婚に関連した日本の新聞・雑誌の論調)

- 1) 「アメリカ軍人と結婚出来るか、所属上級将校の承認が必要」米兵との交際、結婚願望が高まってきた状況を表す記事。(読売報知1946年2月23日)
- 2) 「三浦光子さん結婚、花婿は進駐軍中尉」(読売報知 1946年4月6日)
- 3) 「宙に舞う国籍、二世に多い二重国籍、三浦光子、呉清源も帰化困難」(朝日新聞1947年1月24日)
- 4) 「“国際結婚 OK” カーテンを外した国籍法」『サンデー毎日』1947年3月9・16日号、p.22.  
尚、この記事は「戦争花嫁」を扱った記事ではなく、日本の国籍法改正との関連でスタルヒン、呉清源、来栖元大使夫妻、ゴード夫人についても若干記載されている記事である。
- 5) 「米兵と日本娘が心中」軍務終了に伴い帰国予定となっていたアメリカ兵と通訳であった日本女性の両人が結婚出来ないことを悲観して江ノ島で心中した記事(朝日新聞1947年3月8日)
- 6) 「晴れて夫君と今夕渡米、国際結婚に結ばれた“幸福の二組”」(読売新聞1947年11月15日) \*1946年5月1日より「読売報知」から「読売新聞」に新聞名を変更
- 7) 「海を渡ったわが娘、愛娘明子のアメリカ便り」『サンデー毎日』1948年8月8日号 pp.16-17.
- 8) 「国際結婚は是か非か」『丸』1949年4月号
- 9) 「日本へ“愛の留学”、米青年が婚約者を募って」(朝日新聞1950年4月6日)
- 10) 「ロータリー 花嫁渡海 米軍将兵(二世が多い)と日本ムスメの結婚しきり」『週刊朝日』1950年4月23日号
- 11) 「サチコさんは既に人妻、密航7度、ウェーバー君の嘆き」と題した記事ではオーストラリア人フランクL. ウェーバー君が北川サチコさんと神前結婚後単身帰国し、その後密航を繰り返して、既に日本人と再婚したサチコさんに会いに来た話を紹介。毎日新聞1950年9月8日
- 12) 「米兵と日本婦人 結婚OK」(朝日新聞1950年9月22日)
- 13) 「ニュース・ストーリー 国際通信：扉開く日米結婚」、レイ・フォーク、『週刊朝日』1951年2月25日
- 14) 「山口淑子、イサム野口と結婚、欧州で挙式、手を携えて日本へ」(毎日新聞 1951年10月17日)
- 15) 「日本人移住と帰化権、米、来春議会で承認せん」(毎日新聞 1951年10月31日)
- 16) 「海を渡る戦争花嫁」(毎日新聞1952年3月8日)
- 17) 「アメリカに渡った花嫁さんのその後、“人情はどこも同じよ”」(毎日新聞1952年4月13日)
- 18) 「雑記長」というコラムで英兵士、仏大統領を通じ、日本娘に結婚申込の記事が掲載されている。(毎日新聞1953年3月14日)
- 19) 「花嫁さん目白押し、きょう渡米登録の締切り」(毎日新聞1953年3月18日)
- 20) 「特派員の手帳：幸せに暮らす戦争花嫁 シドニー」(朝日新聞1953年5月8日)
- 21) 「3千人の花嫁、太平洋を渡るニッポン・ムスメ」『サンデー毎日』1957年7月28日号
- 22) 「“ニッポン娘見本市”、世界をチャームするその秘密」の記事より「愛される“戦争花嫁”藤原道子さんの話」の小見出しで若干、「戦争花嫁」のことがふれられている。『週刊読売』1958年2月2日
- 23) 三浦光子の離婚報道

『婦人朝日』1952年6月号、『サンデー毎日』7月28日号、『別冊週刊サンケイ』1959年9月1日号に掲載。三浦と同じく東宝のスターで米軍将校と結婚し、その後離婚した木匠まゆりに関する記事も『週刊東京』1957年4月6日号において三浦の離婚と同じ論調で報道されている。この他にも有名人の国際結婚として歌手のナンシー梅木、山口淑子（現在名、大鷹淑子）などがあるが、こうした有名人の、国際結婚に夢破れてさびしく帰国する、というストーリーは読者の興味と関心と呼び、それだけに「国際結婚＝破談、転落」というインパクトを与えた。雑誌では前述の1949年の『丸』が初めて「戦争花嫁」を扱った記事であり、それを含めて1959年12月までに延べ42本の記事が様々な週刊誌・月刊誌に掲載されている。そのうち比較的好意的に記述しているのは8本、比較的中立的に事実を中心に記述しているのが10本、スキャンダラスに又は否定的に書いてあるのが24本である。

代表的な否定的記事として：

- 24) 「米軍将校に告ぐ、日本娘を妻にするな、問題を投じた在日牧師の切言」『サンデー毎日』1953年6月7日号
- 25) 「アメリカ兵を夫にするな、ある“戦争花嫁”の告白」『週刊朝日』1953年7月5日号
- 26) 「黒人花嫁の悲劇、海を渡った日本の花嫁」『週刊読売』1953年10月18日号
- 27) 「東の間の結婚ラッシュ：近ごろの“赤線基地”の御殿場」『サンデー毎日』1954年2月21日号
- 28) 「事件 闇黒街の“戦争花嫁”、ある混血児の運命の分岐点」『週刊新潮』1957年8月12日
- 29) 「国際結婚は悲しからずや、戦争花嫁はいまどうしている」『週刊サンケイ』1958年9月14日号
- 30) 「ストップ！国際結婚」『週間女性』1959年1月11日号

## 史料 2

## 『羅府新報』に掲載された記事の見出しより

## ステレオタイプ形成に影響を及ぼした戦後日本の世相紹介と「戦争花嫁」関連記事

(1/1/46 ~ 12/31/46)

- 1) 「親しく見聞せる 日本の近況を語る」。尚、小見出しには「東京の光景、学校と娯楽場、服装と食糧、交通機関の混雑、秩序維持の役」などがある。米国陸軍少尉 久保田博寄稿 (1/1/46)
- 2) 「占領地の女性 近寄れぬ日本女性、退屈がる『勝利の兵隊』達」。小見出しには「日本女性への憧れ、若い女の風紀問題」などがある。元朝日新聞ベルリン特派員 守山 義雄寄稿 (1/5/46)  
尚、1月7日・8日にも同タイトルで守山氏が戦後のヨーロッパでの状況を交えながら寄稿している。
- 3) “G.I’s… Stay Out!” ダンスホール内の4人の日本女性が所在なさそうに座っている写真入の小記事で、銀座のダンスホールにG.Iの立ち入りを禁止するマッカーサー司令部からの通達を伝えている。1月15日からの公娼廃止令に関連したマッカーサー司令部の対応を示す記事。(1/17/46: 英字面)
- 4) 「米国出征軍と彼地で結婚した花嫁さん達が紐育港に着き、夫に面会せんとして化粧中の光景」というコメント付の写真のみの記事。欧州戦線で出征した米国兵と結婚したヨーロッパ女性が渡米したことを紹介している。  
(2/11/46)
- 5) 「二世将校等は現下日本を何と見る、帝都進駐4ヶ月半の感想、日本を訪れて」というタイトルの2回シリーズで谷崎不二男氏の文を掲載。(2/14 & 15/46)
- 6) 「自由を履き違へた『夜の女』を大検挙、警視庁18名を槍玉に」。羅府新報では「夜の女」という表現を用いて、公娼禁止令後に街にあふれ出た女性を初めて取り扱っている。(2/23/46)  
尚、この種の記事はその他に「米兵相手の闇の女 三百名一斉検挙、自由を履き違えた女学生も」(3/12/46)、「転落する闇の女」(9/9/46)、「人妻は生活苦から闇の女へ淪落、なぜ彼の女らは夜の女へ?」(10/22/46)、「お医者失業3万余、看護婦は闇の女へ、当局の無為無策に非難の声」(11/19/46)、「第2回『闇の女』全国一斉検挙、闇の女出沒絶つために」(11/23/46)、「闇の女と間違えられ、職業婦人も検徴、利き過ぎた『検挙』指令へ 婦人の民権蹂躪と紅い抗議」(12/11/46)、「行き場のない女 女の悩み」という記事で在東京の武藤尚吾氏が「闇の女」のことをコラムで紹介 (12/19/46)
- 7) “Veteran’s bride barred from entering this country” という見出しで、日系米人2世の Robert Kitajima 元軍曹が、日系カナダ人2世の Mary Etna 嬢と結婚生活をする為に妻をカナダから米国に入学させる申請をしたが不許可になったことを示す記事。当時は日系であるが故にカナダ国籍であっても「同化不能の外国人」扱いとなって米国入国が許可されなかった。こうした申請がその後も多く出された結果、入国を許可する判例(シアトルの連邦裁判所でのマコーミック判決。PC紙 1946年8月10日号参照)が出されるようになり、後に「戦争花嫁」の入国が認められる布石となった。(3/7/46)
- 8) 「米兵と結婚した日本娘の入米、許可を議会へ要求」(3/12/46)。この記事が最初の「戦争花嫁」の米国入国問題を扱った記事。法的に入国を禁止されていた為に連邦議会に働きかけて私法制定を求めたもの。その後日本人妻の入国を求める私法の制定を多くのアメリカ人の夫より提出されるようになり、公法213「日本人戦争花嫁法」(1947年)制定の布石となった。
- 9) 「高度のモラル 健康な慰安」日米恋愛嚴重に取締る…マ総司令部の発表」。小見出しは「二世兵士と日本娘

も厳禁」(4/4/46)。GHQは反フラタニゼーション政策の一環で米兵に自粛を求めた。

- 10) 「帰国者の目に映じた日本の種々相—在米同胞に想像出来ますか—(四)東京にて、角田敏夫」という4回シリーズの連載記事。4回目の記事(4/8/46)において米軍兵士と交際する日本女性について、嫌悪感に近い感情を抱きながらも冷ややかな論調で報道している。
- 11) 「病気心配して居た息子はスター三浦光子と結婚、古報を手に喜ぶ合田中尉の両親」(4/10/46)
- 12) 「米兵 独逸娘と結婚禁止、無粋な進駐軍司令官(5/22/46)。ドイツ進駐軍司令官の通達の背景には増加するドイツ女性の妊娠や自殺の問題がある。羅府新報ではドイツの事例を紹介することにより、日本でも同様の問題を抱えている点と、ヨーロッパ駐留の日系二世にも関係あるものとして報道したのであろう。同様の記事(交際禁止問題、自殺事件問題)が6/6, 6/13にも掲載。
- 13) “Nisei GI Brides En Route To Hawaii” 英字面(5/23/46)。イタリア人女性とフランス人女性結婚した日系米人兵士2組がそろってNY港に到着し、これから二人の日系兵士(442部隊所属)の故郷のハワイへ帰還することを伝える記事。同様の記事としてコロラド州出身の二世兵士がイタリア女性と結婚し、アメリカに連れて帰る記事が8/17の英字面に、またベルギー人女性と結婚した日系二世兵士の話が10/23の邦字面に記載されている。
- 14) 「観て来た日本、<sup>ソ連</sup>蘇聯を恐れる日本人、一般大衆は親米感情強い、帰米したマクガフィン特派員の印象談」(6/5/46)。シカゴサン紙外報部のマクガフィン氏との一問一答形式による記事で、この中で同氏は「米兵と日本娘の混血結婚は独逸進駐米兵とドイツ娘との結婚の如く問題化するか」との間に、「米兵は日本娘を遊び相手と考えてるが、結婚といふ真剣な考えはない。旧来の日本男子が女を玩具と思ってた程度だ」と答えている。
- 15) “Wanna Date …in Tokyo?” 英字面(7/3/46)。日本人女性とのデートの時に必要な簡単な日本語会話表現や日本のエチケットについて総指令部が小冊子に纏めて発行したことを紹介する記事。
- 16) 「ドン底日本(三)」(7/10/46)。帰米二世記者角田敏夫氏による連載記事で、「あくどい化粧をしたパンパンガール(進駐軍向の街の娼婦)」という表現を用いて戦後日本の社会状況を伝えている。
- 17) 「マニラ婦人、米軍に捨てられる」(7/18/46)。フィリッピンで多数の女性が米軍進駐兵士の妻となっていたが、実際に兵士と正式に結婚して渡米した女性は少なく、捨てられてしまうケースが多いことを伝える記事で、これから日本で起ころうとしている問題と関連つけて報道している。
- 18) “Permit Alien Wife To Join GI Spouse” 英字面(7/29/46)。米兵の妻である日本生まれの日独混血女性のアメリカ入国を「割当て外(non-quota)」の移民として認める判決が連邦裁のマコーミック判事によって出されたことを報道。敵性外国人とみなされていた日本人/日系人のアメリカ入国は1924年の排日法以降認められなかったが、この判決はその後の日本人戦争花嫁法(1947年)の制定のきっかけとなった。
- 19) 「敗戦国に帰ってくる復員兵士(一)」(8/1/46)。角田敏夫氏による連載コラムで、戦後の復員兵の問題や米兵相手の娼婦の様子を冷ややかな目で描写している記事。
- 20) 「濃厚な化粧の銀座の女性」(8/12/46)。「街の女」のような濃厚な化粧をした日本女性が銀座に多く見かけるようになったことを嘆き、服装と化粧の再検討が求められてきているという記事。
- 21) 1946年9月~12月に掲載された記事：
  - ア) 米兵などを相手にした売春婦に関連する記事
    - ① 「転落する闇の女」(9/9/46) 在日本、角田敏夫氏による記事。
    - ② 「人妻は生活苦から闇の女へ淪落、なぜ彼の女らは夜の女へ」(東京特報)(10/22/46)
    - ③ 「お医者への失業3万余、看護婦は闇の女へ、当局の無為無策に非難の声」(11/19/46)
    - ④ 「第2回『闇の女』全国検拳、闇の女出没絶つために」(11/23/46)

- ⑤「闇の女と間違へられ職業婦人も検挙、利き過ぎた『検挙』指令へ、婦人の民権蹂躪と紅い抗議」(12/11/46)
- ⑥「行き場のない女、女の悩み」在東京、武蔵省吾による記事(12/19/46)。「闇の女」のことをコラムで紹介。

イ) ダンサー関連の記事

- ①「ダンサーよ！踊れ 教員の月給のために、都下に3000人がいる」(10/1/46)。都内のダンスホールに働くダンサーに外貨を稼いでもらって、そこで得た外貨を都の教員の給料に充当する、という東京都の方針を伝える記事。
- ②「舞踏税は踊る人から徴収してネ、議会へ踊り子達のデモ」(11/29/46)。都下のダンサー300名が、ダンサーからではなくダンスホールにくる人から税金をとるようにと議事堂にデモをしたことを伝える記事。
- ③「揉める日本 食糧から(4)」(12/26/46) 角田敏夫によるコラム。この中で都内だけで40軒近くのダンスホールがあり、3000人以上のダンサーがいることを紹介している。

ウ) 日系人と結婚したスターの関連記事

- ①「郷田中尉のスター花嫁、三浦光子渡米手続き中、結婚しても依然人気は物凄い」(9/21/46)。
- ②「歌手としての荊の道へ、日本人となって更生の“李 香蘭”」(12/7/46)。戦前、戦中と音楽、映画の分野で「中国人」を演じてきた中国生まれの日本人、「李 香蘭」(山口淑子、現在名は大鷹淑子)が、戦後、「日本人」の芸能人として再出発する旨を伝えた記事。

エ) 「私生児」「遺児」に関連する記事

- ①「混血児生むミス日本」(10/25&26)。角田敏夫氏による2回シリーズの記事で、進駐軍兵士との間に出来た「私生児」の問題を嘆き、若い女性に警鐘を鳴らしている。
- ②「女は弱けれど母は強し、忘れられた『靖国の妻』」。小見出しには「遺児を育てつゝ生活する人々」(12/13/46)。日本のいわゆる「戦争未亡人」や「戦災孤児」の問題について伝える記事。

オ) その他

- ①「日本娘、大ヘン宜しい、米國へ同伴 心配ナイ」、小見出しには「蝶々さんと結婚の米兵、来社して語る」(11/16/46)。日本女性と結婚したインディアナ州出身の白人男性が『羅府新報』社を訪れて、妻として日本女性は素晴らしいと語る。

### 史料3

#### Japanese American Citizen League (JACL)

#### 機関紙 *Pacific Citizen*

#### A. 日系二世記者による終戦直後の日本の社会状況や日本に駐留する兵士関連の記事

(1945年8月～1946年12月までのもの)

\*この時期の記事は欧州戦線での日系兵士のことや全米各地にいる日系人関連のニュースを主に掲載していて、日本関連の記事は少ない。

- 1) “A Letter From Yokohama : Nisei Soldier With U. S. Unit In Japan Sends Impression”  
(9/15/1945)。この記事は戦後P.C紙に初めて掲載された日本関連の記事。二世兵士がこの時期に日本に駐留することは、日系人としての立場上難しい面があることを率直に語っている。
  - 2) “Two Thousands Nisei Troops On U.S. Duty In Nippon” (10/27/45)。この記事で2000人以上の二世兵士が日本に駐留していることが報告されている。
  - 3) “Nisei WACs Arrive For Duty In Japan” (11/10/45)。13人の二世女性兵士 (Women’s Army Corp, 略してWAC) が、アメリカの女性兵士として初めてハワイより日本に入国したことを伝える記事。
  - 4) “Nisei G.Is In Japan” (1/5/46)。Editorial として掲載された記事で、アメリカの占領政策において二世が多いに貢献し、日本の民主化の手助けとなっていることを報じている。
  - 5) “People In Japan Show Friendly Attitude Toward Nisei G.Is” (1/12/46)。Washington News Letterと題したコラムでの記事で、日本人は二世を一般のアメリカ人と見なし、アメリカ人として対応していることを伝えている。
- \*1946年2月以降、二世兵士を含むアメリカ兵の交際や結婚問題についての記事が見られる。
- 6) “Japanese American Soldiers In Japan Want To Come Home, Just Like Other U. S. Troops” (2/2/1946)。この記事で記者は多くの二世兵士が他の兵士と同様に日本女性と公園をデートしている様子も書いている。
  - 7) “See Few Marriages Between U.S. Troops, Girls In Japan” (3/2/46)。この記事で初めて日本女性とアメリカ兵との結婚問題についてふれている。
  - 8) “Nisei G.Is Give Object-Lesson In Democracy to Japan People” (3/9/46)
  - 9) “Nisei G.Is In Japan Included In Public Fraternalization Ban” (4/6/46)。GHQ司令部から出された米軍兵士の日本人女性との交際禁止令は二世兵士も例外にあらず、と伝える記事。
  - 10) “California Nisei Officer Weds Noted Japanese Film Actress” (4/13/46)。カリフォルニア出身の二世兵士郷田氏が日本の有名女優、三浦光子と4月4日に結婚したことを伝える記事。
  - 11) “L A Nisei Weds Film Star” (4/27/46) 上記の記事とほぼ同じ内容のもの
  - 12) “Japanese Wife of U.S. Officer Dies in Tokyo” (5/4/46)。米国紙の東京特派員であったアメリカ人の夫と子供と共に渡米することを戦前、日本政府から拒否されていた日本女性が戦後米国下院で米国入国の特別許可がでた矢先に病死したことを伝える記事。連邦議会は1924年以降「帰化不能な外国人」として扱ってきた日本国籍者の永住目的の入国を例外的に私法を成立させて認めた。この女性は米兵と結婚した日本女性の入国を認める道を作った先駆者である。
  - 13) “The Nisei Soldier : G. I. Ambassadors with Japanese Face” (6/1/46)。二世兵士の民間大使としての活躍ぶりを紹介。

- 14) “Blind Girl in Tokyo Depot Crowd Befriended by Nisei G.I.” (6/15/46)。上野駅で二世兵士が大混雑の中で困っていた盲目の少女を助けた美談を紹介。
- 15) “War Veteran Settles Down with First Japan War Bride” (8/31/46)。日本国籍のドイツ系日本人女性が「日系戦争花嫁」の第1号として、米国入国を私法により許可され、夫の故郷のシアトルで新生活に入ったことを紹介する記事。

## B. 日系「戦争花嫁」の入国が増え始めた時期の日系社会の反応を伝える記事

(1950年1月～1952年12月)

- 1) “Actress Bride of Nisei Officer Impresses Hollywood Studio” (1/28/50) 二世の夫の帰米をサンフランシスコで待っていた日本女優の三浦光子がハリウッドのスタジオを訪問した記事。同様の記事は同年7月29日にも掲載されている。
- 2) “Cho-Cho-San on Television” (2/18/50)。コラム「Nisei USA」の記事でNBC TVでのオペラ番組「蝶々夫人」の成功と占領中の日本での日米結婚を関連付けて‘Modern-Day Butterfly’として報じている。
- 3) “House Passes Private bills on G.I. Brides” (3/18/50)。JACLの反差別委員会(A.D.C)の努力で「戦争花嫁」の入国を認める私法が通過したことを伝える記事。最近では連邦議会が好意的になり、日系「戦争花嫁」の入国を私法で認めることが多くなった、と報じている。
- 4) “Japanese Girl Arrives Here To Wed Occupation Sweetheart” (3/18/50)。この記事の中でJACLの反差別委員会の尽力で1947年の日本人戦争花嫁法成立以降もいくつかの「戦争花嫁法の修正法案」を通過させ824名の日本女性が入国した。しかし有効期限が切れた後は100以上の特別な私法をその都度出されたが実際に通過した私法はこれまでは少なかったことを紹介している。PC紙では8月19日に成立したMcCarran Bill (別名G.I. Brides Bill: Public Law 717) の成立まで Private Bill による入国例の記事を多く掲載している。また同法成立後も関連記事は多く掲載されている。
- 5) “Urge ‘Compassionate Action’ For Passage of G.I. Brides Bill” (3/25/50)。アメリカが海外に兵士を駐屯させている限り国際結婚は起きるので、その受け入れの為の法の整備が必要である、とJACLの反差別委員会のマイク正岡氏が訴えている記事。
- 6) “Japanese Actress Will Sing Before Mainland Audiences” (6/3/50)。日本のスターの山口淑子(PC紙では別名Shirley Yamaguchi)の記事。その後も同様の記事が数編掲載されている。
- 7) “Many Japanese War Brides In U.S. Unhappy, Says Editor” (6/24/50)。日米タイムズ(SF)社長(浅野七之輔氏)の「1000人以上在米だが多くの戦争花嫁は不幸であり、三浦光子場合もその失敗例である」と指摘した記事。日系コミュニティでの指導的立場にある浅野氏の発言は大きな影響力をコミュニティ内に与えた。
- 8) “Notes from Hollywood” と題したコラム「Nisei USA」の記事(7/8/50)。ハリウッド映画“East is East”(邦名、『東は東])の主演女優の山口淑子は「戦争花嫁」役で出演しているが、この物語は新法のもとでアメリカ入国をするストーリーとなっていると伝え、これは『マダムバタフライ』の新バージョンであると評している。山口淑子の関連記事はその後も多く掲載されている。
- 9) “Honolulu Report: The War Bride Cometh” (12/23/50)。“When Johnny Came Marching Home Again with a Foreign Bride He Stirred a Lot of Tempests Among the Old Folks at Home” という見出しの文で書かれた記事は日本からやってきた息子の花嫁(「戦争花嫁」)の派手な化粧、服装、様態などに大変失望したという義母のコメントを掲載している。当時の「戦争花嫁」がいかにコミュニティ内で見られていたか、ということを率直に示す記事である。

- 10) “Report 2, 310 G.I Marriages In Japan During Occupation” (2/24/51) 終戦後2,310人がG.Iと日本で結婚、その多くが日系二世兵士と」という記事

\*1951年に入っても私法により入国した「戦争花嫁」に関連した記事が多数掲載されている。

\*その他の注目記事

- 11) “G.I-Japanese Romance Keeps U.S. Consulate busy in Japan” (9/29/51)。1952年3月に失効するGI Brides Actまでには6000組が結婚するだろう(多くは2世)。これまで4000組結婚したうちまだ231人しか入国出来ていない、ということを指摘する記事  
(ビザ取得や私法発行の手続きの難しさ、夫、朝鮮半島への出兵)
- 12) “GIs and Japanese Brides” (11/3/51)。「Nisei USA」のコラムでの記事。Pacific Citizen紙の本社のあるSalt Lake CityでのGIと日本女性との結婚に対して賛否両論の反応を紹介する記事。異人種間結婚の問題について好意的な論調で書かれている。
- 13) “Japanese War Bride” (12/1/51)。「Nisei USA」のコラムでの記事。山口淑子主演の戦争花嫁の結婚を扱ったハリウッド映画“East is East”が観客からの反応をテストし“Japanese War Bride”にタイトル名を変更したことに関する記事。観客の好意的な反応に対し、今後日系社会がこの映画や442部隊を扱った映画の成功より好意的にアメリカ社会も受止めるのでは、と期待。翌年1/12号でもこの映画の成功についてコラムに記載されている。日系ジャーナリストのBill Hosokawa氏も3/8付けのP.C紙のコラム“From the Flying Pan”で‘Japanese War Bride’の成功を願う文を掲載。上記映画が日系人の否定的なステレオタイプ形成や異人種間結婚に対する否定的な考えを植え付けるのではないかと懸念する投書が掲載されている(4/5/52)。
- 14) “Many Nisei Among GIs Wed To Japanese Girls In Rush Ceremonies Before Deadline” (3/22/52)。GI Bride Bill 失効(3/19/52)の前の日本での進駐軍兵士との結婚ラッシュを紹介。戦後8000人以上の日本人女性が日本で結婚式をあげたと指摘。
- 15) “Arizona Nisei Women Fete Nine War Brides” (7/12/52)。アリゾナ州で9人の戦争花嫁が「Arizona Nisei Women’s Club」の例会に招待された記事→日系2世女性と戦争花嫁という観点で興味ある記事。似た記事として52年11月7日号のPC紙にもNew YorkのJACL Manhattan支部での例会に4人の戦争花嫁が夫と出席した記事を掲載。
- 16) “Seek National Organization For Japanese War Brides” (8/9/52)。戦争花嫁の全米組織を作りたい、との記事メリーランド州のHisako Nagashima Stevens夫人が全米48州とハワイに7000人いるという日系戦争花嫁の団体 Japanese War Brides Club of Americaを組織したいとの記事。
- 17) “Figures show Rise in Entries of Japan War Brides Into U.S.” (8/16/52)。移民帰化局による日系戦争花嫁の入国の数についての記事。50年8月19日のGI Bride Act, Public Law 717により51年6月30日までに125人が入国し、同法施行後51年12月までには972人が入国した、と報じている。
- 18) “Japanese War Brides Learn Basic English at Army Post” (9/20/52)。戦争花嫁がワシントン州の基地内で他国からやってきた「戦争花嫁」と共に、英会話、米国料理などを学んでいる記事。
- 19) “Report 1,300 Nise Soldiers Married Japanese Brides During Occupation Period” (9/27/52)。1,300人の日系二世兵士が日本女性を駐留中に結婚し、全米兵との結婚数は8,381組(相手の73%は白人,15%が2世,12%が黒人という統計も紹介)。この記事ではアメリカニュース会社Collier’sの東京特派員のPeter Kalischer氏の記事を紹介している。尚、この記事は52年11月2日号の『週刊朝日』にも掲載されており、GIベビーについても触れている。

(平成14年1月31日 受理)